

鹿児島県立博物館に寄せられたヒラズゲンセイ情報

廣 森 敏 昭*

Notes on *Cissites cephalotes* in KAGOSHIMA PREFECTURAL MUSEUM

Toshiaki HIROMORI *

はじめに

2002年8月3日の南日本新聞の朝刊に、「幻の甲虫 知覧で生息確認」という見出しでヒラズゲンセイが紹介され、鹿児島県立博物館が情報提供の窓口になった。その後ヒラズゲンセイに関する情報が13件、標本も7頭寄せられた。諸文献等に紹介されているこれまでの鹿児島県のヒラズゲンセイに関する記録と今回の新聞記事をきっかけに博物館に寄せられた情報をまとめて報告する。

1 ヒラズゲンセイの発見と命名の経緯

ヒラズゲンセイ *Cissites cephalotes* (Olivier, 1792) はツチハンミョウ科に属し、体長2～3cmの鮮紅色をした珍しい昆虫である。この昆虫は、1935年(昭和10年)に高知県安芸中学校の佐々木重治先生のコレクションから初めて3頭発見された。次の年の1936年に北大の河野広道博士は、3頭のうちの2頭はトサヒラズゲンセイ *Horia tosana* の雌雄、1頭はササキトビイロゲンセイ *Cissites sasakii* の雄と2属2種の昆虫として分類した。その後1953年(昭和28年)に、高知県の岡本啓氏らにより、この2種は実は1つの種の雌雄であり名称もトサヒラズゲンセイ (*Horia tosana*) と統一され、多くの図鑑にこの和名と学名が用いられるようになった。

しかし、後に黒沢(1985)による再検討が行われ、本種は東南アジアに広く分布する *Cissites cephalotes* と同一であるとされ、和名もトサヒラズゲンセイからヒラズゲンセイと改称され、現在に至っている。

2 分布と生活史

日本での分布は、近畿(和歌山県、兵庫県、大阪府)、四国(高知県、徳島県、香川県、愛媛県)、九州(鹿児島県、沖縄県、長崎県対馬)などである。

ヒラズゲンセイは主にクマバチの巣の周辺で発見されることからクマバチに寄生している昆虫であることはわかっていたが、その詳細な生活史についてはまだまだ未解明な所も多い。しかし、高知県の吉松靖峯氏らの研究によりかなり解明されてきた。その概要は次のようである。

5～8月に羽化してきたヒラズゲンセイはすぐに交尾し、交尾したメスはクマバチの巣の入口から巣に入りこみ、巣抗の奥で産卵する。卵期間は2週間ほどであると考えられる。孵化した1齢幼虫はクマバチ成虫につかまってクマバチが吸蜜に訪れる花に着陸し、この花に訪れる別の

* 〒892-0853：鹿児島市城山町1-1 鹿児島県立博物館



(クマバチの体毛につく1齢幼虫)

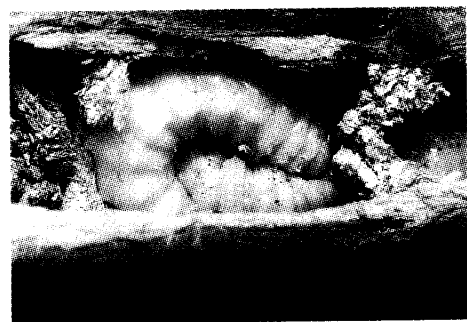
クマバチに乗り換える。乗り換えたクマバチが運良く子育て中のハチであった場合、クマバチの造る花粉団子やクマバチの幼虫を食べて育つ。実際、吉松氏は2002年7月にヒラズゲンセイの幼虫がクマバチの幼虫を食べる所を目撃し、写真撮影もしている。その時の状況を引用させていただく。

「7月19日に徳島県鳴門市で、市内の街路樹の枯れ木に造られたクマバチの巣でちょうどクマバチの幼虫を食べつつあるヒラズゲンセイ幼虫を発見しました。枯れ枝のクマ

バチの巣には巣房が4つあり、クマバチを食べつつあるヒラズゲンセイ幼虫以外にも3頭の小さいヒラズゲンセイ幼虫を同時に発見しました。

ヒラズゲンセイの幼虫はクマバチの幼虫を約2日で完全に食いつくしました。当日採集してきた枯れ枝のクマバチの巣にはヒラズゲンセイの幼虫が小室を造るスペースがありませんでしたので、別のスペースのあるクマバチの巣へ移しかえたところ、すぐに小室を穿孔し、約24時間で完全に小室を完成させ、入口に木くずで蓋をし、その中で脱皮し6齢幼虫になりました。小さい方のヒラズゲンセイ幼虫も急速に成長し、小室を造り6齢幼虫になっています。」

この小室は竹束(1984)が観察した「擬蛹室」(杉原・郷原,1996)と考えられ、これ以降はヒラズゲンセイの幼虫は一切食わず、このまま越冬し翌年の春に脱皮し終齢幼虫となる。その後20日前後で蛹化し蛹になっている。蛹になった時期は、竹束(1984)では5月17日、吉松(1998)では4月29日、吉松(1999個体1♀)では4月21日となっており、20日前後で羽化している。また成虫の生存期間も20日前後である。



(ヒラズゲンセイ5齢幼虫)

これらの観察から、吉松氏はヒラズゲンセイの生活史を1年1化と考えている。

3 2002年7月までの鹿児島県におけるヒラズゲンセイの記録

古い記録から採集日、採集地、採集者、個体数・性別の順に示し、次に[]内にその記録の報告者、年、雑誌名、巻号：ページを示した。

- ① 1936・8・22, 鹿児島市(採集地名, 採集者名, 個体数等のデータなし) [松田隆一, 1937, 昆虫界, 5(36):144]
- ② 1937 or 38・月日不詳, 鹿児島市高麗町, 採集者不明, 1♀, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料:1~2]
- ③ 1954・5・15, 屋久島栗生, 岡留恒丸, 1頭, [岡留恒丸, 1973, 屋久島の昆虫相:136]
- ④ 1975・月日不詳, 川辺郡笠沙町野間池, 重信〇〇, 1♂, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料:1~2]
- ⑤ 1977・5・27, 川辺郡笠沙町野間池, 吉松定昭, 1♀(標本 高知市科学図書館保管), [未

発表]

- ⑥ 1986・7・6, 川辺郡知覧町郡, 岡義人, 1 ♀, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料: 1~2]
- ⑦ 1986・7・10, 川辺郡知覧町郡, 岡敦子, 1 ♂, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料: 1~2]
- ⑧ 1986・7・25, 川辺郡知覧町郡, 岡義人, 1 ♀, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料: 1~2]
- ⑨ 1986・9・12, 鹿児島市平川町福平小学校付近, 福田輝彦, 1 ♂, [岡義人, 1986, 鹿児島昆虫同好会大会資料: 1~2]
- ⑩ 1987・6・21, 枕崎市蔵多山山頂, 今給黎靖夫, 1 ♂, [今給黎靖夫, 2002, SATSUMA52 (126): 140]
- ⑪ 1988・5・21, 西之表市納曾, 尾形之善, 個体数不明・写真撮影, [日本の生物3(1): 9]
- ⑫ 1989・6・15, 徳之島母間, 採集者不明, 1 ♂, [野田正美, 1990, 月刊むし(227): 38]
- ⑬ 1989・6・27, 枕崎市鹿籠麓町南方神社, 今給黎靖夫, 2 ♂ 2 ♀, [今給黎靖夫, 2002, SATSUMA52 (126): 140]
- ⑭ 1989・6・29, 枕崎市鹿籠麓町南方神社, 今給黎靖夫, 1 ♂ 2 ♀, [今給黎靖夫, 2002, SATSUMA52 (126): 140]
- ⑮ 1989・7・1, 枕崎市鹿籠麓町南方神社, 今給黎靖夫, 2 ♂ 1 ♀, [今給黎靖夫, 2002, SATSUMA52 (126): 140]
- ⑯ 1999・6・22, 奄美大島名瀬市中央林道, 1 ♂ (飛翔中) [北村英忠, 1986, 月刊むし, (345): 44]
- ⑰ 2000・7・1, 鹿屋市田淵町, 今村久雄, 1 ♂, [今村久雄, 2002, SATSUMA52 (126): 141]
- ⑱ 2002・4・28, 川辺郡笠沙町野間池, 1 頭 (6 齢幼虫死体), 吉松靖峯, [未発表]
- ⑲ 2002・7・29, 川辺郡知覧町永里, 1 ♂ 1 ♀, [2002・8・3南日本新聞朝刊]

4 新聞報道後、鹿児島県立博物館の収集したヒラズゲンセイに関する情報

新聞報道があつてから約15件の情報が県立博物館に寄せられた。ベニカミキリなどとの混同が懸念されたが、新聞に写真入りで紹介されたためか寄せられた情報はほとんどヒラズゲンセイに関するものだった。確かだと思われる情報だけ、その採集日、採集地、採集者、個体数・性別、その他の特記事項の順に報告する。

[薩摩地方]

- ⑳ 2002・7・27, 揖宿郡頰娃町郡, 西修, 1 ♂, 標本 鹿児島県立博物館所蔵
- ㉑ 2002・7・30, 川辺郡知覧町東別府, 中木原敏孝, 1 ♀, 標本 鹿児島県立博物館所蔵
- ㉒ 2002・8・1, 川辺郡知覧町永里, 安藤勉, 1 ♂ 2 ♀, 標本 鹿児島県立博物館所蔵
- ㉓ 2002・8・3, 川辺郡知覧町郡, 永山睦美, 目撃情報 夜9時頃花火をしていたところ1頭飛んできた

- ②④ 2001・6・27, 加世田市麓, 山ノ口敬浩, 1 ♂ 1 ♀ のペア写真撮影
- ②⑤ 2002・7・8, 揖宿郡喜入町喜入, 前原美代子, 目撃情報 1 ♂
- ②⑥ 2002・7月初旬, 鹿児島市平川, 下野洋見, 目撃情報 仕事場の角材に4頭いた
- ②⑦ 2002・5~6月頃, 阿久根市倉津国民宿舎近く, 佐潟幸弘, 目撃情報 杉の木のクマバチの巣から10頭くらい出てきた

[大隅地方]

- ②⑧ 2002・6月中旬, 肝属郡佐多町尾波瀬, 内園明宏, 1 ♂, 標本 鹿児島県立博物館所蔵
- ②⑨ 2002・8・16, 肝属郡田代町大原, 上ノ原和孝, 1 ♂ 自宅の壁に止まっていた, 標本 鹿児島県立博物館所蔵
- ③⑩ 2001・5・27, 垂水市柊原, 松崎俊暁, 1 ♀, 標本 採集者収蔵, この記録は新聞記事をきっかけに博物館に寄せられたものではなく, 平成14年度の鹿児島県昆虫標本展に出品されていた標本を筆者が見つけたものである

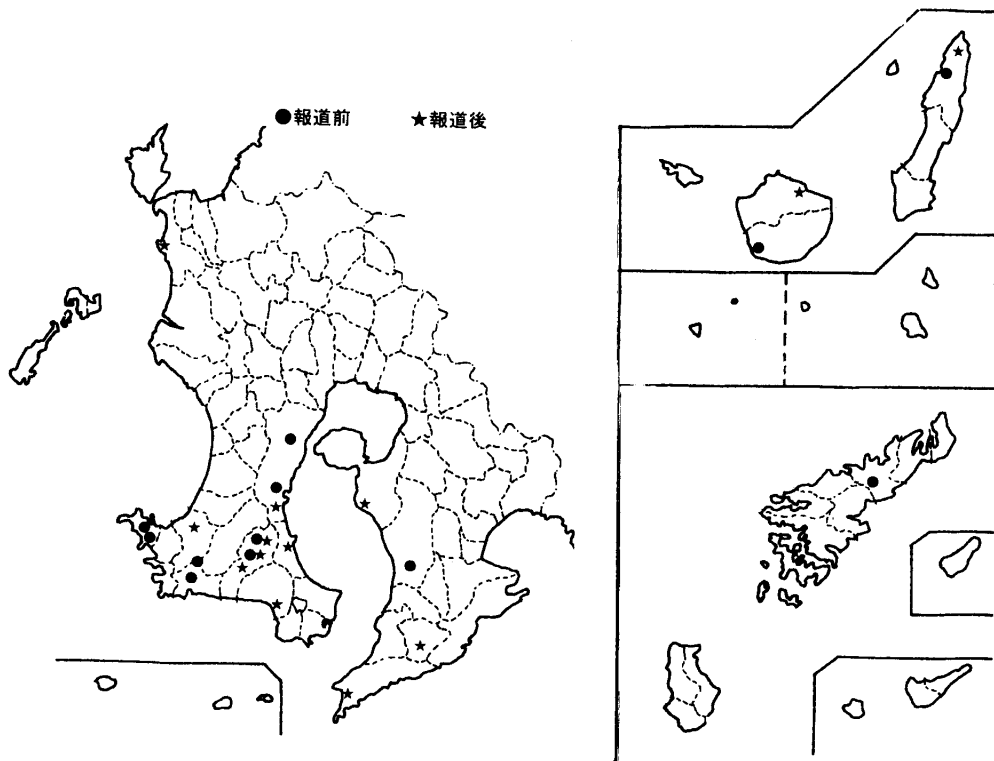
[離島]

- ③⑪ 2002・6月上旬, 西之表市国上国上小学校, 高石卓洋他, 1 ♂ 写真撮影
- ③⑫ 2002・6月中旬, 屋久島宮之浦屋久島高校内, 土持祐太・小田茂巳, 1 ♂ 生きていた, 標本 鹿児島県立博物館所蔵 前日も2頭目撃している (♂♀のペアか)

5 鹿児島県におけるヒラズゲンセイの記録分布図

4, 5の採集地をまとめた分布図が下図であり, 次のようなことがいえる。

- ・ 知覧町郡や笠沙町野間池などは, 1970・80年代も2002年も分布が確認されている。ヒラズゲンセイの安定した産地と考えられる。



- ・ 新しく発見された産地は10カ所であるが、大隅半島に3カ所増えた。阿久根は鹿児島県の北限にあたる。
- ・ 県北部（伊佐・川薩）や内陸部（始良・曾於）での記録がまだない。

6 ヒラズゲンセイの月別発生状況と雌雄数

(1) 月別に発生状況をまとめると、次の表のようになる。

月	4	5	6	7	8	9	10	不確定	計
報道前の過去の記録	0	3	5	7	1	1	0	2	19
報道後、館に届いた情報	0	1	4	4	3	0	0	1	13
合計	0	4	9	11	4	1	0	3	32

- ・ 鹿児島県での成虫の発生は5月から9月までで、ピークは6～7月である。
- ・ 最も早いのは5月15日（屋久島）で、最も遅いのは9月12日（鹿児島市）である。

(2) 雌雄数について

正確に記録された個体のみの雌雄数は次のようである。

♂ 20頭 ♀ 15頭

- ・ 35頭という少ない数のデータであるが、5頭の差が出た。

おわりに

2002年8月3日の新聞報道のきっかけとなった二町一成・松比良邦彦両氏、多くのヒラズゲンセイに関する情報や標本を寄せてくださった方々、また鹿児島県の本種の記録や本種の生活史に関して貴重な資料や写真・文献を提供していただいた高知県の吉松靖峯氏と徳島県立博物館の大原賢二氏に心から感謝申し上げます。なお、本報に掲載した写真は2枚とも吉松靖峯氏の撮影によるものである。

引用文献

- 杉原勇三, 1982, ゲンセイ. 高知昆虫往来, (15), 4-7.
- 杉原勇三, 1982, ゲンセイ (承前). 高知昆虫往来, (15), 4-7.
- 吉松靖峯, 1998, ヒラズゲンセイの生活史に関する新知見 I. 蛹化及び羽化に至る後期発育各期について. ゲンセイ, (72), 17-20.
- 吉松靖峯, 1998, ヒラズゲンセイの生活史に関する新知見 II. 飛来行動について. ゲンセイ, (72), 21-23.
- 吉松靖峯, 1999, ヒラズゲンセイの生活史に関する新知見 III. 後期発育の観察, 特に夏季における擬蛹の存在について. ゲンセイ, (74), 38-42.
- 大原賢二, 2002, 徳島県のヒラズゲンセイ. 徳島県立博物館研究報告, (12), 1-13.